

### 第三章・ナワガイ

「荒々しいバジャウルの山岳民族は自らの血で窒息して横たわり、  
そして、カフィールは足場を固めた。」

「下ベンガルでの訓話」 A. ライアル卿

自然界において、傷ついた動物を仲間が追いつめる、容赦ない残酷さほど悲惨で邪悪な光景はほとんどない。世界の西洋人がこの粗野な生まれながらの本能を遙かに上回っていたのは、おそらくキリスト教文明と、涼しくて爽やかな気候のためである。ヨーロッパ人の間では力は敵意を、弱さは哀れみを引き起こす。東洋ではすべてが異なる。安全は成功の中だけに、平和は繁栄の中だけにある。スエズの間では人心の傾向はそのようである。皆が倒れた者を見捨てる。皆が倒れた者に襲いかかる。

マムンド溪谷での戦いの記事において、部族民が退却する敵を追跡し、孤立した部隊を圧迫する活力に読者は印象を受けたかもしれない。戦争においてこれは正常で現実的な方針である。しかし山岳民族は軍事的知識からではなく、自然な性向からそれを採用していた。彼らの戦術は彼らの性質の結果である。道徳的、政治的、戦略的な行動はすべて同じ原則に則っている。恐怖しつつ不機嫌に軍隊の通過を見守っていた強力な部族は、彼らの背後に弱さの兆候が現れるのを待っていたのである。旅団が地域を支配し、自信と成功を収めている限り彼らの連絡は自重され、蜂起は局所化されていた／しかし、停止、反転、退却により、すべての方面において恐るべき連合体が立ち上がった。

もし読者がこれを念頭に置くのであれば、この章が取り扱う立場を理解することができる。本書の範囲を超える他の多くの問題を説明することができる。忘れてはならないのは、辺境戦争の偉大なドラマはペシャワールからコロンボ、クラチエー（\*カラチ）からラングーンに至る劇場を埋める莫大な静かで注意深い観客の前で演じられることである。

九月一七日にピンドン・ブラッド卿がナワガイで直面した戦略的および政治的状況は、困難で危険なものであった。彼は敵国に進出していた。彼の前にはハツダ・ムラーの呼びかけによってさらなる前進に対抗するためにモーマンド族が集まっていた。彼が従えていた一個旅団は敵が守っているベドマナイ峠を突破できるほど強力ではなかった。計算に入っていた第二旅団は一二マイル離れたマムンド溪谷に完全に費やされていた。四日の行程分離しているパンジコラ川の第一旅団は移動するのに十分な輸送手段がなかった。一方エルク將軍の師団はシャブカドルの北東の難しい土地を痛いほど苦労して進んでおり、あと数日間には到着できなかった。こうして彼は、それを通り抜ける退却こそが最大の危険と困難になる「山峡のネットワーク」の背後で孤立したのであった。

これに加えて敵地、またはいつでも敵となる可能性のある土地を越えて伸びる六〇マイルの連絡線がマムンド渓谷での予期せぬ暴動によって深刻な脅威にさらされた。彼は二つの戦火の間にいた。これもすべてではなかった。大きな権力と影響力を持つ首長であるナワガイ族のカーンの忠義は、ビンドン・ブラッドの旅団の存在によってのみ保たれていた。インド政府が唱えたように、旅団がマムンド渓谷のジェフリーズ准将に合流するために行軍した場合、この強力な首長はイギリスへの反抗に全力を投じたであろう。マムンド渓谷の炎にベドマナイ峠の炎が加わって、強烈な大火を引き起こし、燃えやすい部族民の間で広範囲に広がったことであろう。バジャウルは男を上げたことであろう。スワットは最近処罰されたにもかかわらず、不気味に扇動されたであろう。デイリは支配者を拒み、その連携に参加していたであろう。山岳地帯全体が燃え上がっていたことであろう。すべての谷が武装した男たちを投入したであろう。ラカライに到着したエルズ將軍は、支援旅団の代わりに敵対的な集団を見つけ、何事も成し遂げずにシャブカドルに戻らなければならないかったかもしれない。

ビンドン・ブラッド卿はナワガイにとどまることにした。ハッダ・ムラーの集団をマムンド渓谷の部族民から切り離す／エルズ將軍に手を差し伸べる／峠を開いたままにして置き、カーンを忠実なままにしておく。ナワガイが状況の鍵であった。しかし、その鍵は多くの危険を冒すことなしに握ることはできなかった。それは大胆なコースであったが、適切に発想された大胆なコースが通常そうであるように、成功した。こうして彼はジェフリーズにマムンド族に対する圧迫作戦を命じ／ナワガイのカーンの政府へ信頼を確かなものとし、すべての敵から彼を「保護」する決意を確信させ／エルズ將軍にナワガイで会おうと回光通信し／キャンプに塹壕を掘って待ちうけた。

長く平和に待っていることもなかった。何世紀にもわたる絶え間ない戦争によって戦術的な本能を進化させてきた部族民が、ナワガイの第三旅団の存在がその望みにとって命とりのであることに気づくのに遅れるはずはなかった。そこで彼らはそれを攻撃することに決めた。スーフィー（\*イスラム神秘主義者）とハッダ・ムラーは、信じやすい信奉者たちにその影響力のすべてを行使した。前者は来世の幸福の希望に訴えた。戦死したすべてのガジたちは、カアバの上の玉座のまさに足元に座るべきであり、褒め称えられ、威厳を与えられ、天国の美女の二重の手当ての魅力によってその苦しみを癒されるであろう。ハッダ・ムラーはさらに具体的な誘導を行った。陣地に突撃した者には銃口が向くことはない。弾丸に傷つくことはない。彼らは不死身である。まだ天国に行くべきではない。地上で名誉を受け、尊敬されて生き永らえるべきである。ハッダ・ムラーの信奉者は来世の快樂の志願者の三倍の死者と負傷者を抱えていたため、この保証はより重要になったようである。この粗野で迷信的な山の息子たちの未発達な心の中にも、経済学と実践哲学の未分化の胚

芽、潜在的な進歩の可能性の証があるように思える。

ある者はこの世の喜びを

ある者は預言者の楽園が来るのを恋い願う

ああ！現金を受け取り、債券を手放せ

遠い太鼓の響きなど気にするな

ウマル・ハイヤーム

(\*一〇四八年生まれのペルシャの学者・詩人)

毎夕、攻撃の可能性のある戦線に騎兵隊を出して、陣営の近くに日没時の攻撃を狙う敵が集まっていることを確認するのは、すべての戦争において賢明な指揮官が行っていることである。一八日、第一ベンガル槍騎兵隊のデラマン大尉の戦隊はベドマナイ峠の方向からやってくる敵の散開した一隊に出会った。とりとめのない小競り合いが起こり、騎兵隊はキャンプに退却した。その夜いくらかの発砲があり、哨兵線から約五〇ヤード離れたところに迷い出た女王陛下の連隊の兵士が、いたるところに潜んでいる残忍な敵に引き倒されて殺された。翌夕、騎兵隊はいつものように偵察した。この戦隊は平野を横切ってベドマナイ峠に向かっている前進偵察隊の戦線に守られて押し出した。突然、長い線となった部族民がヌラーから立ち上がって一斉射撃を行った。馬が撃たれた。戦隊は旋回して短縮駆足で脱出し、専門的に「接触の確立」と呼ばれるものに成功した。

今や約三〇〇〇人の敵の大規模集団が平野に現れた。日没の約三〇分前、彼らは踊り、叫び、ライフルを発射した。山岳砲兵隊は数発の破裂弾を発射したが、距離が大きすぎあまり利益はなかった、それとも損害というべきか？そして暗くなった。その夜、旅団全体は攻撃を予測し続けていたが、非常に中途半端な試みが行われただけであった。これは簡単に撃退され、軍の側では女王陛下の連隊の一人が殺された。

しかし、二〇日にナワガイのカーンから明確な情報があった。すなわち、その夜キャンプに決然とした攻撃が行われることになる、と。騎兵隊の偵察は再び日暮れに敵と接触した。将校たちは一時間早く夕食を取り、八・三〇頃発砲が始まったときにちょうど終わった。長距離からではあったがキャンプの位置は周囲の高みから見渡されていた。そこから、今や徹底的なライフルの銃火が放たれた。すべてのテントが撃たれた。塹壕に入っていない将校と兵は伏せるよう指示された。弾丸の大部分は陣地の一方の側の胸壁を飛び越え、腹ばいになった人々に害を与えずにブーンと音を立てて通過していった。しかし歩き回るのは危険であり、またこの高みから撃ち込まれる銃火は全員にとつて癩であった。

今やキャンプのすべての側面に剣による決然とした激しい突撃が行われた。約四〇〇〇

人にも上る敵が最大の勇氣を示した。彼らは塹壕の直前まで駆け寄り、まさしく部隊の銃剣の下で、死ぬか、死にかけていた。攻撃の矛先はイギリスの女王陛下の歩兵連隊に向けられた。その夜キャンプにいた多くの人が言うように、これは幸運なことであった。敵がそのように突撃することを決定し、連発ライフルに直面していなかったなら、陣地を破られていたかもしれない。

しかしイギリス軍の火砲は圧倒的であった。その統制は見事であり、その帯びている武器はより恐るべき弾丸によってすべての突進を食い止めた。自信を持った兵士たちが完璧に制御されていた。敵の突撃に際して兵に連発銃の使用命令が出された。砲は照明弾を発射した。この大きな打ち上げ花火は空中で破裂して星になり、ゆっくりと地面に落ちて、素早く走ってくる部族民の群れの上に青白く、ぞっとするような光を投げかけた。そしてライフルの弾倉の中の一〇個の弾薬筒がほぼ瞬時に発射されたため、小銃射撃のポンポンという音は単一の強烈な咆哮となった。そのような銃火を前にして何者も生存は不可能であった。勇氣、獐猛さ、狂信、何も役に立たなかった。すべてが一掃された。笛が鳴った。独自の銃火は機械のような精度で停止し、分隊の着実な一斉射撃が再開された。攻撃が続いた六時間の間にこれが一回ではなく、一二回行われた。第二〇パンジャブ歩兵隊と騎兵隊もその前線に加えられた攻撃に着実に耐え、撃退した。やがて部族民は完敗にうんざりし、憂鬱に無秩序に丘に退却した。

その夜キャンプにいた人々は皆、最も不快な経験をした。塹壕にいた人々が一番マシであった。何もすることもなく、見るものもない他の人々は、次の弾丸が彼らに命中するかどうかに思いを巡らせながら六時間横たわったままであった。ある一張りのテントに一六個の銃弾の穴が見つかったという事実から、銃火の深刻度についてある程度想像がつくであろう。

ウォードハウス准将は一一時頃に負傷した。彼は塹壕の周りを歩き、攻撃の進行と弾薬の消費について指揮官と協議し、報告後、ちょうどビンドン・ブラッド卿の元を去ったとき弾丸が足に命中した。重症で痛みが幸運にも危険な傷ではなかった。

キャンプに落ちた弾丸の数が多かったことを考慮すると、イギリス側の損失は驚くほど少なかった。全報告は以下のとおり……

#### イギリス軍将校

重傷―― ウォードハウス准将

軽傷―― マン獣医大尉

イギリス軍兵士

死亡 負傷

女王陛下の連隊…

一 三

現地兵士―負傷 二〇

その他― 六

全兵士中の合計 三二

騎兵馬と輸送動物の犠牲は最もひどかった。一二〇頭以上が死亡、負傷した。

ほとんどの場合、敵は仲間の死体を運んで撤退したがシェルターの壕の外に横たわるおびただしい死体は彼らの攻撃の勇氣と活力を証明していた。翌朝、ある山砲の散弾の発射に際して頭を半分吹き飛ばされた一人の男が見つかった。彼は砲口、彼が止めたと信じていた砲口、の一ヤード先に横たわっていた。つまり盲目的輕信と狂信の犠牲者は合理主義と機関砲の結びつきの作用の下に幸せに地上を去ったのである。

もちろん敵の損失を正確に見積もることは非常に困難であった。しかし、翌日に二〇〇人の死体が近くに埋葬されたことが立証され、多くの負傷者がさまざまな村へ運ばれたと報告された。概算において損失は約七〇〇人と見積もられた。

これで事態は片付いた。ハツダ・ムラーの集団の後ろ盾が崩れ、そのことは急速に広がった。ナワガイのカーンは、政府に対するその揺るぎない忠誠を熱心に主張した。マムンド族は落胆した。翌日、エルズ將軍の率いる旅団が谷に現れた。ビンドン・ブラッド卿は配下の騎兵隊と共に騎行した。二人の將軍はラカライで会った。エルズ將軍はマラカンド野戦軍の第三旅団によって補強され、ベドマナイ峠を通過してハツダ・ムラーの敗北の仕上げをすることが決定された。ビンドン・ブラッド卿と騎兵隊は、ムマンド溪谷のジェフリーズの部隊に加わり、そこでの事態に対処する。したがって、マラカンドからペシャワールに二個旅団を連れて行くという当初の計画は破棄された／そして第三旅団を除いて、テイヤ遠征に必要なビンドン・ブラッド卿の部隊はノウシエラを経由して集合地点に向かうことになった。後にわかるように、この計画は出来事の経過に合わせてさらに修正された。

私は二一日の朝に第三旅団に再び加わり、夕方には護衛隊に便乗して谷を越えてエルズ將軍の旅団に会いに行った。モーマンド野戦軍の動員は Imperial Service Troops (\*英印軍に協力するために藩王国が出すことになった軍隊)の初の運用として特徴づけられる。パティアラのマハラジャとパータブ・シン卿の両者が軍を率いていた。後者は熱病にかかっており、テントの外に座っていたが、いつものように陽気で立派

であった。祝祭行列の壮大なユニフォームで見る者すべての注目を集めたこの華麗なインドのプリンスは、今では実務的なカーキ色を纏っており、連隊の長としての勤務において最も喜ばしい反響を得ていた。すべての費やされた人命と金銭にもかかわらず、すべての軍事的、政治的失敗にもかかわらず、一九八七年の辺境大戦争は少なくとも英国がインドの他の地域を治める基盤を示し、誰が友人で誰が敵かを明らかにしたのである。

私はポロがインドのプリンスと英国将校の良好な関係の強化に非常に大きく関係していると考えざるを得なかった。ポロを帝国の要因として語ると奇妙に聞こえるかもしれないが、国家的競技がハイ・ポリテイクス（\*国家の生存にかかわる政策）において役割を果たしたのは歴史上初めてのことではない。ポロはイギリスとインドの紳士が同じ条件で交わった共通の基盤であり、大いなるお互いへの尊重と尊敬はその競技会に帰されて然るべきである。これに加えて、ポロはインドの下級将校の救いであり、若い将校は従来のように、昼夜を問わずブランデーをテーブルの「目玉」としていない。ポニーとポロ・スティックがその度胸と判断力、落ち着きを高めるゲームをプレイするために、彼らをバンガロ―と食堂から誘い出したのである。Indian Polityの著者は、英国と現地の将校が通常の年功序列で、同じ立場で一緒に勤務する日が来ると断言している。私がイギリス軍将校について知っていることからして、私自身はこれが可能であるとは信じられない／＼しかし、仮にそれが実現したとしたり、その道はポロのグラウンドで準備されていたのであろう。

第三旅団のキャンプが再び攻撃されることはなかった。部族民は前夜の経験から苦い教訓を学んでいた。しかし塹壕が暗闇の中に並んでいて、女王陛下の連隊が占めている前面を敵の小隊があちこち動き回っていたと言われている。非常に優れた一斉射撃が一晩中、折々に行われた。暗闇から数発の落下弾が戻ってきたが誰にも不都合はなかった。そして軍の大部分は前夜に失った睡眠を補った。

翌朝ピンドン・ブラッド卿とそのスタッフ、第一ベンガル槍騎兵隊の三個戦隊は、ナワガイ峠を通り抜け、イナヤット・キラでジェフリーズ將軍と合流した。今や第三旅団はマラカンド野戦軍を離れ、エルズ將軍の指揮下に入ったのでこの物語の本来の範囲を超えてしまった／＼しかし完全を期するため、またその驚くべき火砲によってナワガイの戦略的状況を救い、ハッダ・ムラーの信奉者に恐るべき損失を与えた見事な連隊について読者はより多くを聞きたいであろうから、私は彼らのその後の運命を簡単に辿ろうと思う。

ウォードハウス將軍が負傷した後、第三旅団の指揮はグレイブス大佐に委ねられた。彼らは九月二九日に、ペドマナイ峠の突破に参加し、続く二日間にはミタイ、スラン溪谷の要塞化された村の破壊に用いられた／＼しかし、これらの作戦には多くの人命の損失は伴わず、

わずか三名の犠牲者で旅団全体がシヤブカドルに到着した。その後女王陛下下の連隊はティラ遠征に参加するためペシヤワルに派遣された。そしてそこでマラカンド、モーマンド野戦軍で得た名声をさらに高めることになるのである。